

シンポジウム「西田幾多郎と鈴木大拙」

提題:「哲学者」としての鈴木大拙

石川県西田幾多郎記念哲学館 大熊 玄

この題目を見た多くの人が違和感を持つかもしれない。西田幾多郎であれば「哲学者」と呼ぶことに異論はあるまいが、だからといって(だからこそ)「哲学者としての西田幾多郎」という題には、意味がない。あるいは「思想家としての鈴木大拙」となれば、幾分その違和感が消えるかもしれない。しかし、その消失が今度は大拙と「思想」との特異な関係を見失わせてしまう。「哲学者」と鈴木大拙には、明らかに食い違いがある。哲学者・西田幾多郎と「一人格」とさえ言われうる鈴木大拙を「哲学者」と呼ぶことへの違和感は、なぜ生ずるのか。そして、その違和感にはどのような意味があるのか。

そもそも大拙自身が、自分を「哲学者」と任じていない。大拙の著作には、まさに哲学者である親友の西田との立場の違いを意識している文章や、哲学者一般と自身との違いを意識している文章が散見される。また、西田も大拙を評して「君は学者を以て自らおらないであろうし、また君を目するに単なる学者を以てすべきでない」と言う。これはもちろん、大拙がいわゆる「学者」におよばないのではなく、それを含みながらもそれだけでは済まないものがあるという意味である。西田はその直後に「君は学才の豊かな洞察に富む人と思う」と続け、「私は思想上、君に負う所が多い」と語る(「宗教経験上」ではなく、「思想上」)。

このような大拙自身および親友西田の言葉に基づき、また、本人の若いときからの「仏教は世界に^{ひろ}弘むべきだ」という思いや「衆生無辺誓願度」という願に基づいても、大拙を言い表す名称としていわゆる「哲学者」を当てることには違和感を覚える。また、まさにその「一人格」と言われる親友西田幾多郎との立場の「差異」のコントラストが鮮やかとなると、「(西田のような)哲学者」ではない存在としての大拙が語られる(上田閑照「西田幾多郎が哲学において受け取った課題を大拙は宗教で受け取ったと云うる」)。二人を対照的に見れば、たとえば西田の居士号(宗教名)である「寸心」が世間的にほとんど知られていないのに対して、居士号「大拙」が本名(俗名)「貞太郎」よりも表に出ていることも「宗教者」としての鈴木大拙を強調する。確かに「宗教者」としての大拙を否定はできない(西谷啓治「もっとも大切なことは、これら総ての根本にある先生の宗教的な使命感とでもいうものではないだろうか」)。

しかし、これらの全てに肯い、大拙が現代日本における随一の宗教者であることを認めながらも、そこには依然として、ただいわゆる宗教家とも言えない、むしろ「哲学者」としての大拙がいるのではないか。ここでは、あえて「哲学者」としての鈴木大拙という題を提することで、その意味を確認してみたい。

もちろんこれは新奇をねらったわけではない。すでに下村寅太郎が大拙をあえて「哲学者」と呼んでいる。つまり、大拙の「もっとも重大な貢献」とは、東西という特殊性を越えて「普遍的世界性において思惟するところ」にあり、「真の意味における哲学の立場」からして、「大拙博士が意識されると否とにかかわらず、客観的歴史的に」言って、もはや「大拙博士の仕事を哲学的といい、大拙博士を哲学者」と言っているのである(「我々の思想史における大拙博士の位置」)。